

希学園 第402回 小5公開テスト 解説動画

下記、URLよりご視聴いただけます。

動画タイトル	URL
第402回公開テスト 小5国語 解説動画(2025年11月9日実施)	https://vimeo.com/1134860956/ce60324d4a

1

ア

エ

感

イ

いわく

3

責任逃れ

ア

メ

手

プ

む

当

あ

発信

期間

共有

美德

事前

予約

2

たいく

主の目

きつた話

碓井の

ひとれる

(記述題)

物騒

きつね

(記述題)

ウ

2

人をはかすきつねをひ
とりでつかまえて、一
条の屋敷にかまれてくる

(同意可)
という約束。

京に出ても知らなばかりで
、なにも知らないこと
にひきめを感じたから。

(同意可)
から。

配点	
1 9・10	各2点×12=24点
2 6・9	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

① (古田徹也『いつもの言葉を哲学する』より) ※問題作成の都合上一部表記を改めています。

1 「よく使われる」という意味であることに気づけば、「批判が向けられる」が明らかにちがうとわかる。

2 「このように…」の段落で「痛税感」「スピード感」「警戒感」の三つについて、「どこか明言を避けてばやかす姿勢、言質を与えず責任を回避する姿勢」があるとまとめている。それに対して、「抜け感」は、「否定的な面だけでは尽くされない奥行きをもち、独特の趣を備えた言葉」の例としてあげられている。

3 「痛税感」「スピード感」のどこについて批判しているのかということである。この文章は「〇〇感」という言葉について書かれたものであり、二つの言葉はその例としてあげられている。

4 1は、「痛税感」という例にひきつづいて「スピード感」をならべている部分なので「また」、2は、「否定的な面だけでは尽くされない奥行きをもち、独特の趣を備えた言葉」の例をあげている部分なので、「たとえば」、3は、「規模感」についてそれまでに述べたのはちがう意味合いを説明している部分なので「ただし」がはいる。

5 「〇〇感」という言葉の持つプラスの意味合いとして「奥行き」や「趣」をあげている。これらを言いかえたのが「いわく言いがたい感覚やセンス」ということになる。「総じて…」の文が「〇〇感」のプラスとマイナスの両面についてまとめていることを見ぬこう。6 「温度感」という言葉が持っている「ニュアンス」について説明している部分である。「留まっている、と。」の「と」に注目すれば、ここまでが説明であることがわかるはず。次の文は、それまでの説明を、「つまり」という形でまとめていることになる。

7 「〇〇感」という言葉の持つマイナスの要素として「明確には言い切らない、責任逃れの姿勢」「自分の言葉に責任をもたずに済む」「明言を避けてばやかす姿勢、言質を与えず責任を回避する姿勢」「人々が自分の言葉に対して責任を取らず」「責任逃れのために多用されがちな言葉」など、くり返し書かれていた。この中から四字の言葉をさがせばよい。

8 問7でも見たように、筆者は「〇〇感」という言葉が「責任逃れ」のために使われていることを批判しているのである。

9 Aは、新聞やテレビなど、不特定多数に情報を伝える手段となるもの。Bは、その場しのぎで将来を見通した深い考えがないこと。Cは、むだな点や複雑さがないこと。Dは、物事があるかないか、はっきりしないこと。Eは、あることがらに直接かわっている人間や団体。「第三者」に対する言葉である。Fは、特に準備したのではなく、たまたまその場にあること。

10 aは、情報などを送り出すこと。車などが出発する意味の「発進」と区別する。bは、同音異義語が多いが、「限定」という言葉に注目する。cは、共同で持つこと。dは、道徳的に正しい行いや価値観。eは、事の起こる前。fは、前もって約束すること。

② (久保田香里『きつねの橋』より)

1 このあと若殿が現れると「はりつめた空気」になったのだから、この部分は「はりつめた空気」とは反対の「空気」だったことになる。そして、若殿が去ったあと、ふたたび元の「空気」にもどっているのである。

2 「うもれる」は「目立たなくなる」という意味でも使う。貞道は「主にみとめられ、名をあげる。京でひとかどの者になる」と考えていた。だからこそ、老人に止められても声をあげたのだろう。

3 「それはなんだ」と言われて「きつねに化かされた話」の説明をしている。この場合の「なんだ」は「どういうことだ」ぐらいの意味で使われている。

4 これより前で、「腕」について書かれていたところを貞道の言葉の中からさがす。

5 直前の「ごつい顔」の男の言葉の中からさがす。「いつてない」とあるので、貞道が言った形になっている部分が答えになる。

6 「わかった。いいさ、そのきつね、ここへひっぱってきてやる。」が約束の内容になるが、これは「ひとりでつかまえられる」という言葉を受けて出てきたもので、前提として答えにいれておきたい。「ここ」は省いてもよいが、書くのならどこであるかわかるように書くべきである。

7 深読みすぎて、離れたところからさがす必要はない。「昼間がいい」は、あとの「夜は物騒だ」と対比されていることに気づけば容易だろう。

8 この部分は、あとの「人の娘にしか見えない」でまとめて言いかえられている。きつねが化かすときには、頭の上に葉っぱをのせると言い伝えられており、化けそこなうとしつぽがのこったままになるとも言われる。

9 直後の二つの段落で説明されている。◎の文にある「きいたことのない名前を出された」は一つ目の段落に書かれていることなので、二つ目の段落をまとめればよい。この段落の二つ目の文に「口ごもってしまった」とあることに注目すれば、そこまでの部分を利用して書けばよいことに気づくだろう。

10 物語の場面分けは、時間・場所・人物(出入り、心情)などの変化が基本である。ここでは、屋敷の中にいた部分と、外に出てきつねと出会う場面、というふうに分けるのがすなおである。